

# クララ・ツェトキーンと次男コスチャ & ナジャ・ツェトキーン夫妻との文通

伊藤 セツ

## はじめに

クララ・ツェトキーン (Zetkin, Clara 1857. 7. 5-1933. 6. 20, 以下単にクララと呼ぶ) の生誕 150 年の記念日は、2007 年 7 月 5 日であった。前稿 (伊藤 2007) で筆者は、ベルリンのドイツ連邦アルヒーフ、SAPMO (ザブモ)<sup>1</sup> に保存されているクララの遺品 [請求番号: NY 4005] の手紙のなかからクララの長男マクシム・ツェトキーン (Zetkin, Maxim 1883-1965) と最初の妻ハンナ (Zetkin-Buchheim, Hanna) の間に生まれた孫ヴォルフガング・ツェトキーン (Zetkin, Wolfgang 1922-? <sup>2</sup>) への 15 通の手紙・葉書を通じて、クララの晩年の私的生活の一部を明らかにすることを試みた。

本稿では、前稿でも何度もその名が現れたヴォルフガングの叔父にあたる、クララの次男、コンスタンチン・ツェトキーン (Zetkin, Konstantin 1885. 4. 15-1980. 4. 6, Costia: コスチャと呼ばれる。Kostia と綴る場合もある) 関連の SAPMO 所蔵の手紙をとりあげる。本稿の目的は、前稿に続いて、クララの私生活的の一端を、コスチャとその妻ナジャ (Nadja) の関係から明らかにすることである。時代は 1927 年の終わりから 1933 年の 4 月まで、コミンテルン内にあっても、「ドイツ共産党」(以下 KPD, クララは 1920 年以來、KPD からドイツ国会議員に選出されていた。) においても、クララの政治生活は苦勞そのものの月日だったはずである。

まず、コスチャの生涯は、日本ではもちろん、ドイツにおいても断片的にしか知られていないと思われるのでその概観から始めたい。

## 1. コスチャの生涯のスケッチ

### (1) 幼少年時代: パリとシュツットガルト

コスチャは数奇な運命をたどった人である。彼は 1885 年にパリでオシップ・ツェトキーン (Zetkin, Ossip 1850-1889. 1. 30) とクララの間にも生まれたが、3 歳で父オシップと死別した。

コスチャは、シュツットガルトで母クララが 1897 年に親しくなり、1899 年に結婚したクララの二人目の夫、画家、フリードリヒ・ツンデル (Zundel, Friedrich Georg 1875. 10. 13-1948. 6. 7) と、10 歳代の初めから兄マクシムとともに 4 人で暮

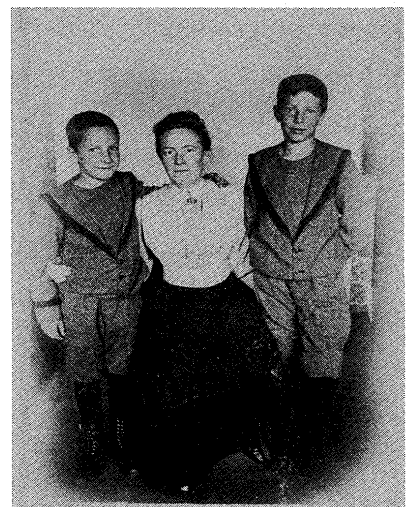


写真 1 (左から) コスチャ、クララ、マクシム (年代不明) (RGASPI<sup>3</sup> 528/1/2006)

1 SAPMO については、本誌前稿 (伊藤 2007: (2)) 参照のこと。  
2 没年は確認できないが、第二次世界大戦時と推測される (筆者未確認)。  
3 RGASPI については、伊藤 (2006) を参照のこと。

らした。ツンデルはすでに1897年に12歳のコスチャを、また、1900年にはバイオリンを持った15歳のコスチャを描き（チュービンゲン、クンストハレ所蔵）、現在もベルリン近郊のビルケンヴェーダーの「クララ・ツェトキン-ハウス」（16547 Birkenwerder Summter Strasse 4）に展示されているクララの肖像画も残している。

シュツットガルト時代には、クララの弟アルトールの娘であるエリザベス・アイスナーや、後に80年を経てカナダでのマクシムの死をベルリンに伝える役割を果たすことになるゲック一家との交流があった。コスチャとマクシムは、シュツットガルトの私立ギムナジウムで中等教育を受け（Puschnerat 2003: 80）、そのあとマクシムはミュンヘンで医学を学んで外科医となった（Badia 1993=1994 Hervé und Ingebourg: 117）。

## （2）ベルリン時代とローザ・ルクセンブルク

コスチャは、1904年か5年にベルリンに行ったと推測される。ドルネマン（Dornemann, Luise）の伝記には、コスチャのことを「ベルリンで勉強し、下宿先のローザ・ルクセンブルクから母親のように世話をしてもらった。彼も医者になったが、2～3年は—おそらくローザ・ルクセンブルクの影響で—国民経済を研究するために勉学を中断している」（ドルネマン 1957=1969 武井訳: 130）と書かれている。

ローザ・ルクセンブルグ（Luxemburg, Rosa 1871. 3. 5-1919. 1. 15）は、ポーランド人であったが、1897年にベルリンに移り住んでいた<sup>4</sup>。コスチャは、そのローザの家に下宿して、15歳年上のローザから愛されたのである<sup>5</sup>。1907年、ローザは、政治経済の研究を彼に勧めて、その上、彼にドイツ社会民主党（SPD）の党学校の講師職を紹介しようとしたが、うまくいかなかった。コスチャは、それからシュツットガルトに帰り、母クララが主筆であった機関誌『平等』（*Die Gleichheit*）の編集を助けた（Badia 1993=1994 Hervé und Ingebourg: 117）。

ローザの『手紙全集』（*Gesammelte Briefe*, Luxemburg 1982-84）には、1907年1月付けの「コスティーク、私の息子！」で始まる最初の手紙から、「ニウニウ（Niuniu）、私のお気に入り（Liebling）、誕生日までにこの手紙をまちがいなく受け取ってくれるといいんですが」で始まる1915年4月10日付けの手紙まで8年間（これは、コスチャ22歳～30歳、ローザ37歳～45歳にあたる）で500通を超えるローザからコスチャに宛てた手紙が残されている<sup>6</sup>。1915年で途絶えるのは、コスチャの第一次世界

4 ローザは、ポーランドのザモシチ生まれで、チューリヒ大学で教育を受けたが、彼女の古い友人の息子グスタフ・リュベックと形式だけの結婚をすることによって、ドイツ国籍を得て1898年、27歳か28歳のときドイツに移住した。クララとは、すでに、第二インターナショナル会議で知り合っていた。それは1896年のロンドン大会であったと思われる。ローザはSPDのなかで活動し、ベーベルやクララと親しくなった。

5 ローザが愛した男性は、レオ・ヨギヒェスのほか、コスチャ・ツェトキン、パウル・レヴィである（伊藤成彦 1991: 13）。西川正雄は、コスチャを、ローザの「15歳年下の恋人」（西川 1989: 126）、「一時期の恋人」（西川 1989: 216）と表現している。また、伊藤成彦（1991）『ローザ・ルクセンブルクの世界』（社会評論社）の扉には、張りのある顔をしたローザの横で俯き加減に立っているコスチャの写真が、また同じく、伊藤成彦訳（1991）のローザ・ルクセンブルクの手紙集『友への手紙』（論創社）の95ページには、ローザが描いたコスチャの肖像をローザと二人で掲げるコスチャの写真が掲載されている（いずれも出典の明記なし）。

6 ローザからコスチャへの手紙は、ローザの『手紙全集』によれば、1907年に27通、1908年に77通（以上第2巻）、1909年に45通、1910年に111通（以上第3巻）、1911年に127通、1912年に111通、1913年に1通、1914年に1通、付録で9通（以上第4巻）、1914年に15通、1915年に13通（以上第5巻）確認される。ローザの手紙の邦訳は多い（カールおよびルイーゼ・カウツキー宛ては川口・松井訳 1983、レオ・ヨ

大戦への従軍のためである<sup>7</sup>。

ローザからコスチャへの手紙によって、第一次世界大戦に対する、コスチャの態度の一端が読み取れる。1914年8月1日、コスチャに、ベルリンに（ブリュッセルから）戻ったと電報を打ち、翌日8月2日、「ニウニウシュ（Niuniusch）、2通の手紙受け取りました。私はあなたといっしょに、あなたのそばにいて、いろいろなことを語り合い相談できたらどんなにいいかと思います。」（中略）。「全世界は、突然、精神病院になりました。あなたの『党から抜ける』については、笑っちゃいました。あなたは、おおきな子どもなの？ あなたはひょっとして、人間から『抜ける』つもりですか？」（Luxemburg V, 1984: 7）<sup>8</sup>。

コスチャは、1915年3月に召集され、6月に衛生兵としての教育を終え、当面衛生兵連隊に入った（Luxemburg V, 1984: 66）。1918年の9月まで、クララをはじめ、ルイーゼ・カウツキーへの手紙のなかにコスチャとマクシムの安否を気遣う表現が何度も現れる<sup>9</sup>。

例えばブレスラウから、1918年9月6日付けクララ宛てに、ローザは、「最愛のクララ、あなたのカードありがとう。私はあなたがとても心配しているだろうと思います。コスチャがもうあなたの保護のもとにあり、マクシムからよい知らせが届いているといいのですが。とにかく時間が許すなら、一行でも書いてよこしてください。それをみると、私は心が休まるでしょう。私のほうは、ヤーコブ嬢<sup>10</sup>がここに来て、3週間の予定でこの近くのグラッツェア連山に出かけたこと以外、新しいことは何もありません。帰路またここに寄るでしょう。私はあなたからの一言を待ち焦がれています。あなたを何度も抱きしめます。あなたの R。」（Luxemburg V, 1984: 407）。

1918年11月11日、ドイツは休戦協定に調印し第一次世界大戦は終結し、クララの二人の息子は無事ドイツに帰還した。その後、2年余り、丁度ローザの死の前後のコスチャの動向を把握する資料を私は発見していない。

### （3）再びシュツットガルト

SAPMOに収集されている手紙で見る限り、1922年2月12日付けの、マクシムからクララへの差出場所不明の手紙（モスクワと推測される）のなかで、コスチャの身の振り方を心配している文面が現れる。そこでは、「コスチャについては、もうしばらく、ドイツで助手を続けるのがベストでしょう。しかし、彼がそうしたいなら、医師としてでないならここでいつでも仕事が得られるでしょう。（後略）」（SAPMO-BArch NY 4005/64, Bl. 64）。また、1922年9月16日、クララはベルリンからマク

---

ギヘス宛ては、伊藤成彦訳 1976、その他数名へ宛てた手紙は、伊藤成彦訳 1991）が、コスチャ宛てのものは邦訳されていない。尤も、クララ・ツェトキーン宛てのものも多く、その中でコスチャや兄マクシムへの言及も多いがこれも邦訳はない。

7 1914年11月1日付け、ローザのハンス・ディーフェンバッハ宛て手紙に、Costia ist noch zu Hause und arbeitet in der Redaktion. という一文がある。zu Hause は、伊藤成彦によれば、「家で」（伊藤 1991: 95）、川口・松井（カウツキー編 1924=1983 川口・松井訳: 261）によれば「銃後にあって」と訳されている。

8 この部分は西川（1989: 215-216）にも引用されている。

9 映画『ローザ・ルクセンブルク』（1985）では、ローザが1917年、ブレスラウ監獄に移されて後のある日、コスティアの計報が届くというストーリーになっているがこれは全くのフィクションであることがわかる。1917年に戦死したのは、ローザが、ハンスネレ、ヘンシェンと多くの手紙で呼びかけたハンス・ディーフェンバッハ（Diefenbach, Hans 1884-1917. 10. 24）であろう。彼は医師であり、『ノイエ・ツァイト』に執筆していた。

10 Jacob, Mathilde (1873-1943)、当時、ベルリンでタイプと複写事務所を管理していた。ローザの秘書。社会民主党のために仕事をしていた。

シムに、「コスチャは、博士論文に力を入れています」と書いていた (SAPMO-BArch NY 4005/64, Bl. 88)11。

1924年2月2日付けのクララのハンナ宛ての手紙 (SAPMO-BArch NY 4005/60, Bl. 98-100) に、コスチャの名が現れ、その後しばしばCと略記されている。

1925年8月12日にシェリエスノヴォスク (Sheljesnowosk) から出されたクララのマクシムとミラに宛てた手紙の終わりは、「CとNから宜しく。母」となっており (SAPMO-BArch NY 4005/64, Bl. 159)、はじめてNが現れる。1925年はコスチャ40歳である。このNは後に頻繁に文通に名が現れるナジャ・マッソヴァ (Massowa, Nadja) のことであり、コスチャは、この頃からシュツットガルトに、ナジャと暮らしていたのではないかと思われる12。

ナジャとは誰か、そして、コスチャがナジャといつどのようにして結ばれたのであろうか。興味深いことであるがほんのわずかの情報しか得られない。知り得ることは、ナジャがロシア人女性で、ロシア将校の妻であったが、1917年の10月革命の勃発の際に子どもたちを連れてベルリンに逃れ、そこでコスチャと知り合いになり、コスチャとシュツットガルトのジレンブーフのクララ・ツェトキーンの家に移った、ということである。いつナジャがベルリンに着き、いつコスチャと知り合いになり、いつジレンブーフに来たのか、またナジャの子どもたちはどうなったか不明である13。

その後、コスチャは、1927年2月6日のクララの手紙から、ナジャ14とともにヴォルフガングの成長を見守るやさしい叔父さんとしての役割を果たしていることを窺わせる。

コスチャ自身の手紙では、1927年11月20日、ジレンブーフから、従姉妹エリザベス15宛てに「ナジャは明日戻ります。彼女が委任状をもってきてくれるといいのですが。ミュンヘンへの訪問が可能かどうかは、ナジャが母からもたらされる知らせにかかっています」(SAPMO-BArch NY 4005/127, Bl. 2) と、ナジャのことを書いている。

- 
- 11 1922年は、ベルリンで、分裂している三つのインターナショナル (「第二インター」「ウィーン共同体」「コミンテルン」) 会議が4月にベルリンでもたれ、クララは日本の片山潜らと「コミンテルン」の代表として出席し、新たな帝国主義戦争に対する闘争、ロシアの援助、ヴェルサイユ条約と荒廃した地域の復興等を呼びかけていた (西川 2007: 158-162)。
  - 12 プッシュネルナートは、Costia und dessen Lebensgefährtin Nadja von Massov (Puschnerat 2003: 373) という書き表し方をしている。しかし、下記注13のゲックの手紙ではNadja Massowaと綴っている。
  - 13 ナジャについては、コスチャの旧友テル・ゲックが、ハインツ・フォスケ宛ての1980年5月5日付けの手紙で書いている。「私に、クララ・ツェトキーンの子の2番目の息子、私の愛する旧友コスチャ・ツェトキーンの子の死の知らせが、航空郵便でもたらされました。この悲しい知らせは、ドイツ生まれの彼の妻ゲルトルト・ツェトキーンから来たのです。この人は、コスチャの二番目の人生の伴侶です。最初の人は、叔母クララのシュツットガルトのジレンブーフの家で生活していたドイツ時代に私たちもとても親しくしていたロシア人女性で、コスチャがベルリンで知り合ったナジャ・マッソヴァでした。ナジャは、ロシアの (手書きのため筆者に判読不能) 将校の妻でした。彼は、1917年の11月革命の勃発の際、命… (手書きのため筆者に判読不能) ナジャは彼女の病んだまだ小さかった息子たちとともにベルリンへ逃げました。そこで、コスチャは、彼女と知りあいになりました。それから、コスチャとシュツットガルトのジレンブーフのクララ・ツェトキーンの家に移りました。その家は今まで彼らの (判読不能) 以来変わらずそこにあります。ナジャは、もうすでに何年も前にベルリンで死んでいます」(SAPMO-BArch NY 4005/127, Bl. 14)。
  - 14 ナジャと呼ばれる女性と推測される名は、クララの手紙では、すでに述べたように、孫ヴォルフガング宛の最初の手紙 (1927年2月6日、コーカサスのキスレヴォダーク、トロツキー・サナトリウムから: SAPMO-BArch NY 4005/61, Bl. 44) に「コスチャ叔父さんやナジェンダ (Nadjeschda) さん」という併記で現れる。ナジェンダが本来の名であるとするロシア人であることが暗示される。
  - 15 エリザベスは、クララの姪である。クララは時々自分のエリザベス宛ての手紙の終わりに「母」と書いている。コスチャは、Liebe Frau Elisabethと書き始めている。

#### (4) ビルケンヴェーダーへ

コスチャは、クラアラが、ツンデルと正式に離婚した後、1929年にシュツットガルトを離れ、ベルリン近郊ビルケンヴェーダーにクラアラのために家を購入した。コスチャとナジャは、二人でそこに住んで、ベルリン滞在時のクラアラを助けた。これが、現在の「クラアラ・ツェトキーン-ハウス」である (Dörnenburg 1997: 46)。

1930年代のコスチャの手紙がSAPMOに残されている。1932年2月6日 モスクワ、ホテル・メトロポール、205号室からヴォルフガング 10歳の誕生日を祝うクラアラからの手紙には、「CとN、そしてあなたのお父さんは、みんな、あなたに誕生日のお祝いをおくります」とあり、コスチャとナジャも名を連ねている (SAPMO-BArch NY 4005/63, Bl. 124) ので、この時はモスクワにいたのではないかと思われる。あるいは、クラアラが、ただそう書き加えただけかも知れないが、クラアラの2人の息子は、結局はロシア人を妻としており、ロシアとドイツを行き来していたものと思われる。

#### (5) 1933年以降北米へーカナダに死す

1933年、クラアラの没後、コスチャは、ドイツからも、ロシアからも、マクシムの前からも消える<sup>16</sup>。しかし、コスチャは1933年以降、プラハからおそらくはフランス経由で北米に亡命して生き延びていたのである。1972年と1973年に、USAのカーリン・ハニーカット (Honeycutt, Karen) のインタビューをうけ (後述) たとき、コスチャには、ゲルトルート (Gertrud) という妻がいた。コスチャは、1980年4月6日に95歳を前にして (4月15日が誕生日) カナダで没した。その知らせはドイツに、コスチャの二人目の妻ゲルトルートから、シュツットガルトのメーリンゲンのテル・ゲック (Geck, Tell) 経由で、当時の東ベルリンのIML (マルクス・レーニン主義研究所) のZPA (党中央アルヒーフ) のハインツ・フォスケ (Vosske, Heinz) にもたらされた<sup>17</sup>。従って、1945年の暮れにベルリンに戻ったマクシムは1965年に生を終える時も、コスチャの消息を知らなかったのではないかと推測される。しかし、これは推測の域を出ない。

---

16 コスチャは、スペイン内乱 (1936-39) に従軍して死んだときえいわれた時期もある (1983年ビルケンヴェーダーの「クラアラ・ツェトキーン-ハウス」での説明。これが事実でないことは、当時のクラアラ・ツェトキーン教育大学のフリッツ・シュタウデ教授も認めていた)。

17 コスチャの最後を、妻ゲルトルート・ツェトキーンは、Halfmoon Bay B.C. カナダから、1980年4月28日付けの手紙でゲック夫妻に「親愛なるテルとレニ！ コスチャが4月6日一復活祭の月曜日一に亡くなりました。彼は、すでに約6年このかた、もはや私たちのコスチャではありませんでした。動脈硬化が、彼の脳を侵しました。彼は長時間、通りや森の界限を歩き回り、私は、しばしば警察に電話して助けを請わなければなりませんでした。(後略)」と書いている。知らせを受けたテル・ゲックは、ゲルトルート・ツェトキーンの手紙の写しを自筆で作成し (SAPMO-BArch NY 4005/127, Bl. 16-17)、1980年5月5日付けで Prof. Dr. Heinz Vosske に送った。フォスケは、1980年6月3日付けで、「尊敬するゲック殿、1980年5月5日のご親切な手紙とコスチャ・ツェトキーンの死去についての悲しいお知らせのゲルトルート・ツェトキーンの手紙の写しに心からお礼申し上げます。私は、関係官庁に、その情報が伝えられるように、指示しましょう。5月の終わり、アルヒーフの用事であなたのお住まいの近くまでまいります。残念ながら、あなたとあなたの親切な奥様を、時間がなくてお訪ねできません。秋に私は多分再びあなたの近くで仕事をしなければならぬでしょう。そのときよろしければ、ほんの短時間立ち寄ります。私は、あなたと奥様が引き続きお元気で、何よりずっと健康でいらっしやることを望みます。ゲルトルート・ツェトキーンの手紙の写しでお手を煩わしたことに本当にお礼を申し上げます。友人としてのご挨拶をあなたの奥様にも。あなたの Prof. Dr. Heinz Vosske」 (SAPMO-BArch NY 4005/127, Bl. 18) と返信している。

## 2. クラーラからコスチャとナジャへの手紙

筆者のクラーラ・ツェトキン研究において、クラーラの次男コスチャは、クラーラとローザ・ルクセンブルクとの関係において位置づけられなければならないものである。なぜなら、コスチャの20歳代、既述のようにコスチャはまぎれもなく、ローザに愛された男性の一人であり、他方でクラーラとローザは、政治的に志を同じくするものであったからである<sup>18</sup>。しかし、ここでは、ローザとクラーラおよび、ローザとコスチャとの関係を意識しながらも、クラーラとコスチャを、母と息子との関係に限定してみていくことにする。伴侶のナジャへの手紙もここに付け加える。

SAPMOには、クラーラからコスチャへの手紙は、1927年12月9日モスクワからを初めとして、1928年6月5日まで8通、ナジャへは1928年1月16日を初めとして同年9月29日まで3通（最初から「母」と手紙の最後に書いているがクラーラはナジャをSieで呼び、親しいものを呼ぶDuを用いなかった）、コスチャとナジャ連名宛ては、1928年8月24日と9月30日キスロヴォドスクから2通と、極めて少ない<sup>19</sup>。しかし、ハンナへは前述のように、1924年2月2日付けの手紙からCとしてしばしば記載されている。コスチャからは、クラーラへは、1933年1月から4月12日まで、9通の手紙が残されている。最後の手紙以外はベルリンから、最後の手紙はプラハからである。最後はナジャとは一緒には居ない様子が窺われる。以下、文通の概観を記す。

モスクワ発、1927年12月9日付けでは、「私のいとしいコスチャ (Mein Herzens-Costia)、私はあなたの1日と2日の手紙を6日に受け取りました。それらは私を有頂天にしました。特に、あなたのR.とのめぐり合わせについてのコメントは、私をととても明るい気持ちにしました。(中略)まず、あなたを安心させることを書きましょう。私は元気です。私は今週中休んでいます(後略)」とある(SAPMO-BArch NY 4005/56, Bl. 14-17)。

続いて、モスクワ、1927年12月25日付けでは、コスチャに、モスクワでのマクシム夫妻との静かなクリスマスの夜の様子が書かれているが、終わりの部分で、「月末にハンナに1月のための100マルク送らなければならないのを忘れないでね。彼女は新年にはお金が必要ですから」と書いている

18 ローザの伝記を書いた、パウル・フレーリヒは、「ローザ・ルクセンブルクの生涯と思想を生き生きと再現するのに最適の人は、クララ・ツェトキンであった。この二人の婦人は永年にわたって同じ活動に従っていた。ともに自己をもった強い個性の人であった。育ってきた環境は異なっていたが、互に相手の体験から影響を受け合い、思想的な見方と政治行動において一致した見解と態度をとるにいたった。ローザの後に生き残った社会主義運動の指導者のなかでクララ・ツェトキンほどに、人間として、また闘士としてのルクセンブルクを、彼女の闘った舞台を、その歴史的状況や闘いに際しての味方と敵を、知っているものは他にはいない。彼女は、資料からのみ判断するものには窺いしることのできないような、ローザ・ルクセンブルクの態度決定に際しての特殊な動機を知っていたのである。クララ・ツェトキンがローザの伝記を書いたならば、どのようなものを書いたかは、彼女がこの僚友を追憶して書いた論文やパンフレットに示唆されている。しかし、クララ・ツェトキンは、1933年に死ぬまで日常闘争に身を献げ、これが仆れた僚友が自分に課した義務に答える道だ、とくりかえし語ったのであった」と書いている(『ローザ・ルクセンブルク』第3版へのまえがき 1948年秋 伊藤成彦訳 1991)。パウル・フレーリヒはこのように書いたが、クラーラとローザの関係は、ローザの没後1922年に発表されたロシア革命批判をめぐる論争の中でのクラーラの位置を検討することなしには語れない。筆者はこれを次の課題としたい。

19 この1927年末から1928年は、クラーラが執行委員をしていたコミンテルンの内部対立がとりわけ激しい時期であった。1927年12月にトロツキーとジノヴィエフが追放された。1928年からクラーラ没年の1933年の期間は、コミンテルンの用語では「第三期」として知られ、「左派」のスターリンと「右派」のブハーリンが対立し、クラーラは「右派」の側にあつたとされる。マグダーマットとアグニュー(1996=1998 萩原訳: 332)によれば、「インターナショナルの『右派』に控えめながら影響をあたえていた彼女は時折スターリンと衝突した」とのことである。

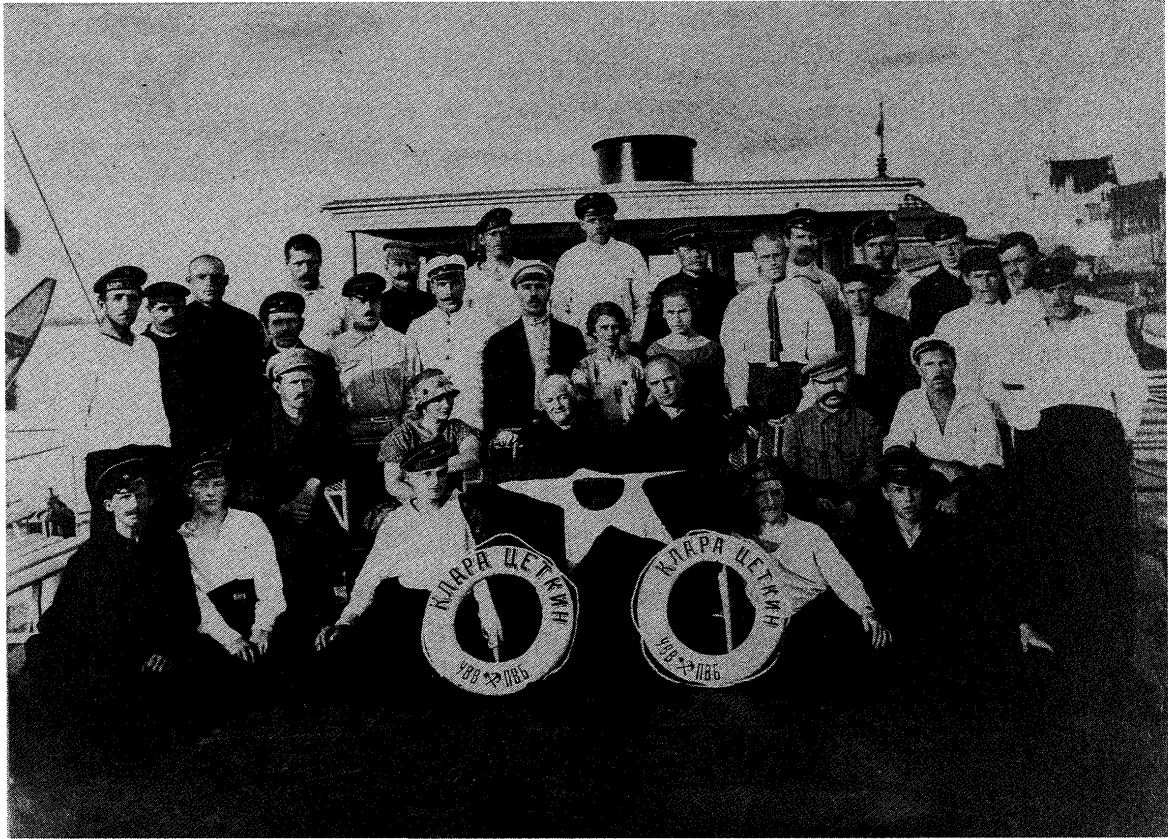


写真2 モーター船「クララ・ツェトキン号」の甲板上  
前列中央がクララ、1925年 (RGASPI 521/1/2042-5)

(SAPMO-BArch NY 4005/56, Bl. 23-25)。

年が明けて1928年1月16日、クララは、ナジャへ、モスクワから書く。「愛するナジャ、昨日午前、10日付けのあなたの手紙、落手しました。そして日曜日にも受け取りました。とてもすてきな週の始まりで<sup>20</sup>、嬉しいです。本当にありがとうございます。(中略)昨日いつになく、思いがけない嬉しいことがありました。ミハエロ・ミハエロヴィッチ、私の汽船<sup>21</sup>の船長が私を訪ねてきたのです。マクシムとミラがいたので会話がはずみました。(後略)」(SAPMO-BArch NY 4005/56, Bl. 30-31)。ナジャへの2月3日付けには、ハンナの2月分生活費に「2月11日に6歳になるヴェルフィのための誕生日の贈り物として30マルクを追加する」ことなどを書いている (SAPMO-BArch NY 4005/56, Bl. 35-38)。

同年、3月7日付けでは、「3月5日はローザ・ルクセンブルクの誕生日でした。私は、毎年、庭から採ったマツユキソウの花束を送ったものです。最後となった1918年にはブレスラウの監獄に送りました。(中略)私の大切なナジャ、私はあなたがたのところへ行きたくて強いホームシックにかかっています(後略)」(SAPMO-BArch NY 4005/56, Bl. 46)。この手紙は、非常に回顧的で寂しい手紙である。コスチャの連れ合いのナジャという女性は、夫コスチャの兄マクシムの先妻ハンナのことや、かつてのコスチャの愛人ローザ・ルクセンブルクについて、クララがこのように書き送ることのできる雰囲気を持っていた人であったことが偲ばれる。

モスクワから、1928年3月13日付けコスチャへの手紙は、KPDや、コミンテルンの政治動向を

<sup>20</sup> 1928年1月16日は月曜日である。

<sup>21</sup> クララは、「クララ・ツェトキン号」という船を持っていた(写真2)。

書き、「スターリンと対立するトムスキー<sup>22</sup>とルイコフ<sup>23</sup> (Tomsky-Rykov と繋いだ書き方をしている: 引用者), 中央派のブハーリン<sup>24</sup>。ああ, 私のコスチャ, このよう状況は何と私を苦しめ, 悩ますことでしょう。それにもかかわらず, 私は, 女性デーのために, モップル (Mopr<sup>25</sup>) その他のために, 多くの文筆活動をしました」という文言がある (SAPMO-BArch NY 4005/56, Bl. 52-55)。この頃のクラウラの私信としては, 珍しく政治的で, スターリン反対派の渦中の人名を明記していた。

しかし, 同年3月16日 (発信地なし, 実はモスクワからだが, 伝を頼んでベルリンから投函された模様) 付けでは, 「12日だったか13日だったかの私の手紙は, 軽率だったかもしれません。私は手紙のなかで, ドイツとロシアの代表会議とその結果について書きました<sup>26</sup>。あなたは, その手紙をむろん, 受け取ったでしょう。—それは書留扱いでした—しかし, 手紙が読まれ, 検閲されることが, あり得ないことではなかったのです。」と書いている (SAPMO-BArch NY 4005/56, Bl. 64-65)。

1928年は, モスクワ, アルハンゲリスク, キスロヴォドスクが, 発信地となっている。この年は, 7月17日から9月1日まで, コミンテルン第6回大会が開かれ, 「コミンテルン綱領」<sup>27</sup> を採択し, 社会民主主義を社会ファシズムと規定した, 後世で問題点を多々指摘されることとなる大会であった。彼女自身多くのものを書いたと言っているが, 他の年に比べてそれほど多くはない。1929年8月クラウラはドイツに帰りビルケンヴェーダーの家に住み, 1931年冬にロシアに戻る。

### 3. コスチャの手紙

#### (1) 1930年-1931年

1930年, 1931年, コスチャのビルケンヴェーダーからの手紙が, SAPMOに5通残されている。うち3通は従姉妹のエリザーベト宛てである。1930年4月2日には, はじめてビルケンヴェーダーを訪問する従姉妹のエリザーベト (エリザベスともいう) に, 駅からの地図を書いた手紙を出している (SAPMO-BArch NY 4005/127, Bl. 4)<sup>28</sup>。その地図は, 77年を経た今日でもそのまま役に立つものであり, この界隈が全く変わっていないことを示している。その他, 10月16日付け (SAPMO-BArch NY 4005/127, Bl. 11), 1931年3月20日 (SAPMO-BArch NY 4005/127, Bl. 13) がある。他の2通はベアテ宛てで, 1930年8月14日付け (SAPMO-BArch NY 4005/127, Bl. 8), 1930年8月25日付け (SAPMO-BArch NY 4005/127, Bl. 9) である。

1930年10月16日付けエリザベス宛てには, コスチャは「今, マクシムと彼の妻が私たちのところにいることは, 母にとって嬉しいことです」と書いているので, マクシムとミラのベルリン訪問が

22 トムスキー, ミハイル (1880-1936)。ソヴィエトの労働組合リーダー, いわゆる「右派」。1936年自殺。

23 ルイコフ, アレクセイ (1881-1938)。古参ボリシェヴィキ。右派反対派指導者。1938年銃殺される。死後名誉回復。

24 ブハーリン, ニコライ (1888-1938)。1919-1929まで『プラウダ』の編集長。1925年以降スターリンと共に主流派を指導したが20年代後半に右派反対派として攻撃され, 1938年に「人民の敵」として銃殺される。1988年ゴルバチョフによって名誉回復。クラウラはなぜかブハーリンを「中央派」と書いている。

25 国際革命家救援組織

26 1928年2月29日のドイツ共産党, ロシア共産党の代表間の秘密協定。コミンテルンの新極左コースが始まったとされる。

27 「コミンテルン綱領」中の「女性問題」の取り上げ方については, 拙稿 (伊藤 1984: 363-364 参照)。

28 この手紙には, ビルケンヴェーダー駅で降りて, クラウラの家に行く道順の地図が当時45歳のコスチャによって手書きされている。1983年と2006年, そして2007年この道順で私はクラウラの家に行った。1930年4月2日にエリザーベトに書き送ったのと全く同じこの道である。コスチャはこれを書いてから50年も生きて1980年4月6日にカナダに没するのである。



窺われる。このあと2人はモスクワへ帰ったのであろう<sup>29</sup>。

## (2) 1933年: コスチャのクララへの9通の手紙

クララの最晩年、1933年の家族の私信で、まとまって残されているのはコスチャからクララ宛てのものである。1933年1月6日から4月12日までの3ヶ月に9通ある。この3ヶ月は、ドイツの現代史の中でも「ワイマール共和国」の終焉からヒトラー「第三帝国」の勃興の時であり、以後12年間の人類の「恐ろしい体験」(マイネッケ1946=1974矢田訳: 7)の始まりの時であった。

この年、1933年1月30日、ドイツではヒトラーが首相となり、2月1日に国会は解散された。2月2日、KPD本部「カール・リープクネヒト記念館」は政治警察によって占拠されたが、2月7日にはKPDは非合法に中央委員会を開催した。2月27日には国会放火事件が起こり、KPDは禁止された。翌日大統領令「民族と国家の保護のための条例」が公布された。3月5日国会選挙でナチ党が288議席を得てヒトラーが権力をにぎったが、選挙妨害にもかかわらず、KPDも81議席(485万票、12.3%)を得た。しかし、政府によって議員資格を拒否されたため国会に立ち入ることはできなかった。ナチ党は絶対多数を獲得することはできなかったため、3月23日非常大権令(全権委任法)を可決し、政府は、国会の承認なしに法律を制定する権利を認められた(フレヒトハイム1948=1971足利訳: 460, 矢野/ファウスト編2001: 90, 等参照)。4月1日を「ユダヤ・ボイコットの日」としたのである。

以下の手紙はこのようなまれにみる緊迫したドイツの状況のなかで書かれているので、暗号のような部分もあって理解しがたいところが多い。

### 1) ベルリン, 1933年1月6日(SAPMO-BArch NY 4005/56, Bl. 106.)

最愛のお母さん、お元気ですか。私のほうは、平穏です。ここは、すべて静かで穏やかです。お天気までも。議員団の使用人(Fractionsdiener)は、ハイゲルマン(Heigelmann)といいます。アンナ、ケーテ、それにファンニーもあなたに心から宜しくとっています。千回ものキスを。あなたのコスチャ。

ゲルラッハの住所への手紙を

### 2) ベルリン, 1933年1月11日(SAPMO-BArch NY 4005/56, Bl. 108.)

あなたが元気か、ナスチャ(Nastja)からすぐ聞きたいです。あなたのところにアウエルバッハ(Auerbach)がいましたか。彼は何を確かめたのですか。ここはすべて平穏です。私はあなたに何度もキスをします。あなたのコスチャ。

マクシム、ミラそして同志イエーガー(Genossin Jeger)に心からの挨拶を

29 ついでながら、1931年1月25日に、クララは、ベルリン、ビルケンヴェーダーからミロヴィドヴァ(クドリンスカヤ)へ、「なぜ2通の手紙に返事をよこさないの、母」(SAPMO-BArch NY 4005/67, Bl. 81)と電報を打っており、1931年6月27日には、「私の熱い思いで愛する子どもたち、マクシムとミラよ、いったい、私が書くべきなんですか。不愉快な子どもたちよ! あなたたちは、あなたたちの年老いた、病気の母親をすっかり忘れてしまったの? 本当に! (中略)それで、ハンナとヴォルフガングといっしょに、7月27日から9月2日までミュールリッツへ行きます」(SAPMO-BArch NY 4005/67, Bl. 82-83)などと書いているのをみると、マクシムとミラが頻りに連絡をとらないか、クララのほうが、手紙を待ち焦がれる状況にあったのであろう。

3) ベルリン, 1933年1月17日 (SAPMO-BArch NY 4005/56, Bl. 110.)

最愛のお母さん, 元気ですか。私はあなたの健康状態を大変心配しています。どうしているか短いものでも書いてください。私のことは心配要りません。近いうちに私は, [ドゥヒェルト] (Duchert) 夫人と話すことを望んでいます。私はあなたを心底から抱きしめます。コスチャ。

マクシム, ミラそして同志イエーガーに心からの挨拶を

4) ベルリン, 1933年1月24日 (SAPMO-BArch NY 4005/56, Bl. 112-113.)

最愛のお母さん, あなたの詳しいお手紙, 本当にありがとう。あなたが見えない目を, わたしのために, こんなに酷使しなければならなかったことを, 私はとてもすまなく思っています。あなたの記憶でやるのが一番ですね。つまり, 全体を熟考し, 全体の最もよい組み立てで, 一つの計画や, さまざまな計画を作ってください。個人的なこと, 社会的なこと, 政治的なこと, 党の政策的なことを。まだ, 固まっていない計画, まだ明確になっていない形式も。でも今後, 記憶している以上のことはできるだけ言わないようにしてください。(中略) あなたにとって, 何かエピソード, あるいは, 頻繁に発生して特別の意味あることが起きている時は, それらを記録してください。あるいは, それらを秘書に口述筆記させることを試みるほうがいいでしょう。お互い関係のある部分である必要は全くありません。そうではなく, あなたが, 実際, たまたま心に浮かんだような, 個別の片鱗でいいのです。全体の計画と関係ないことでも記録してください。でも, それ以外のことについては, 前にも書いたように, またあまり言わないでください。特に, 人がしばしば何か思い出について話すとき, 思い出は口伝いに再現されて一面的印象を与えたりします。(中略) あなたが, マクシム, ミラ, あるいはナジャに説明するとき, そして何かに関連して書き留めたり, 書き付けたりする時はいささか事情が違いますけど。(後略) 愛するお母さん, 理性的に, 医師の指示に従ってください。私はあなたをしっかりと抱きしめキスをします。あなたのコスチャ。

皆さんに心からの挨拶を。

5) ベルリン, 1933年1月27日 (SAPMO-BArch NY 4005/56, Bl. 116.)

最愛のお母さん, お手紙, 本当に本当にありがとう。水曜日に大きなデモンストレーションがありました。風と凍えるような寒さのなかで, ひどい衣服をまとって, 大衆は数時間にわたって耐えました。労働者階級の統一行動への要求は強いです。私は, 指導者の展望がしっかりしていないことを危惧しました。あなたやナスチャ (Nastja) は元気ですか。体をお大事に。私は何度もあなたにキスをします。あなたのコスチャ。

マクシム, ミラそして同志イエーガー (Gen. Jeger) に心からの挨拶を

6) ベルリン, 1933年2月1日<sup>30</sup> (SAPMO-BArch NY 4005/56, Bl. 119.)

最愛のお母さん, お手紙心から感謝しています。キッシュ (Kisch) の本は, よい宣伝本ですね。非常にすぐれたルポルタージュと思います。(中略) しかし, 本ははっきり意識してプロパガンダとし

30 前日1933年1月30日, ヒトラーが首相となり, 2月1日に国会が解散されたというのに, 何事もないような書き方である。アンダースン (1945=1974 大木訳: 265) は「首都での1月30日は, 他の日と変わらず, 退屈で, もの淋しく, 憂鬱な1日だった。暴動も一揆もなかった。」と書いている。

て書かれたものです。(中略)役に立つ本です。(中略)他の同志以外にゼップ・ミラー (Sepp Miller<sup>31</sup>)が、あなたに心から宜しくとのこと。いいえ、私は、ヴォルフィの誕生日を忘れてしまっておりませんよ。私は今日 20 マルクと挨拶を送ります。あなたに何度もキスを。

あなたのコスチャ、マクシムに宜しく。

7) ベルリン, 1933年2月7日 (SAPMO-BArch NY 4005/56, Bl. 121.)

最愛のお母さん、お元気ですか。政治的展開があなたにあまりに重くのしかかっているのかもしれませんが、予期しないことではありませんでした。もっとも、コミンテルンにとって、1923年よりずっとずっと容易ならないことです。あるいは中国においてもそうですね。あのころは、間違った作戦や戦略についてまだ議論できました。しかし、今は決して敗北について、素朴なあきらめも口にすることはありません。SPDの責任について言ってみてもつまみません。それは、部分的説明であって、私たちにとってなんの正当化にもなりません。私はハンナと話すためにすぐ彼女のところに行こうと思います。

最愛のお母さん、私はあなたに何度もキスをします。あなたのコスチャ、

マクシム、ミラそして同志イエゴール (Gen. Jegor) に宜しく。

8) ベルリン, 1933年2月22日 (SAPMO-BArch NY 4005/56, Bl. 124.)

最愛のお母さん、今、注射の最初の強い作用が鎮まり、治癒のきざしがはっきり現れているのようですが。私は、医学的理由から、あなたを政治的に煩わせたくありません。私が知っている限りでは、ローザは自発性理論 (Spontaneitätstheorie)<sup>32</sup> を作ったのでは決していないのですが、彼女が大衆運動と自発性に関して書いたことが、今では、はっきりと証明されています。(中略) 私は、春が、あなたの治療を助けることを望みます。素敵あなたに私は何度もキスをします。あなたのコスチャ、

マクシムとミラ みなさんに宜しく。

9) プラハ, 1933年4月12日 (SAPMO-BArch NY 4005/56, Bl. 126.)

愛するお母さん、お元気ですか。この困難な時に、あなたについて、ナジャについて何も知らないということ、そして、あなたを不安にさせ心配させなければならないことは、もっとも辛いことです。私は、ドイツの反革命の発生を、ただちに体験することができたことは、多分非常に有益であることだと、うれしく、かつ期待もしています。私の個人的体験を、私は、今述べることはしません。なぜなら、そうでないと、この手紙は決して潜り抜けられないでしょうから。今重要なことは、あなたが元気かどうかを知ることです。ここでは、私に、キッシュ (Kisch) とその夫人が親しくしてくれて

31 ミラー、ヨーゼフ (ゼップ) (1883-1964) KPD メンバー、ナチスの迫害を逃れて亡命し 1946 年帰国 (Weber/Herbst 2004: 508-509)。

32 ローザの事に触れているこの箇所は、この情勢でコスチャとクラウラに深い意味を持っていたに違いない。ローザは、大衆の運動はある一定の条件の歴史的条件のもとで自然に発生するものであると強調していたが、フリーリヒ (1948=1991 伊藤成彦訳: 169) は、後に「ローザはこの主張のために重い罪を背負わされることとなった。すなわち人々は彼女の見解を歪めて戯画化し、彼女は自然発生性理論を作り、自然発生性信仰に、あるいは自然発生性神話に陥った、と主張したのである。こうした主張をまっさきにしたのはグレゴリー・ジノヴィエフであって、共産主義インターナショナルにおけるロシアの党の権威を高めるためであった」と書いている。

います。あなたのコスチャ

チェコスロヴァキア, プラハ I, メラントリチョヴァ 14, E. E. キッシュ  
マクシムとミラそしてみなさんに何度も宜しく。

1933年4月12日, コスチャが, なぜ一人プラハに在るのか的確に説明できないが, ナチ党が「ア  
ーリア人種」をドイツ民族共同体の構成員とみなし, ユダヤ系ドイツ人や東欧系の人々を異分子とし  
て弾圧を開始したため, ユダヤ系ロシア人を父としたコスチャはこの段階でドイツを脱出したものと  
みられる。手紙中にある「個人的体験」とは, あるいはそのことを指しているかもしれない。ナジャ  
はその時点でどこに在るのかは明確ではない。手紙で何回かナスチャと呼んでいる人物とナジャは同  
一人物なのかははっきりしない。これらのことの手がかりを得ることを今後の課題としたい<sup>33</sup>。以下  
に SAPMO 所蔵の, コスチャ最後の手紙の筆跡を紹介する。この時コスチャは 48 歳であった。

Prague 12/Nr. 1133. 37  
Liebste Mutter 127  
Wie geht es dir? Das wird das  
Härteste in dein schwierige Zeit,  
nichts von hier, von Vajda zu mir  
und End in die neue - Folge lassen  
zu mir.  
Doch hier sind wir 2. Ich, so wird  
müde ich auch von Kuba, dass  
ich die Ausbreitung der Arbeit geze-  
genheit mit an der in Halle erleben  
kannst.  
Meine persönliche Erfahrung mit  
ich jetzt zu schreiben mich begin-  
nen, denn auch diese Briefe wie  
we kommen.  
Die Hauptreihe ist jetzt, zu wissen  
wie es dir geht.  
Ich kann mir Kind in eine Frau  
sehr lieb zu geben.  
Ich kann dich nicht als den Kabin-  
Tisch: ~~belegungsstelle~~  
Prague I  
Melantričovova 14.  
E. E. Kisch  
Ihre Mutter. Mir in alle liebe.

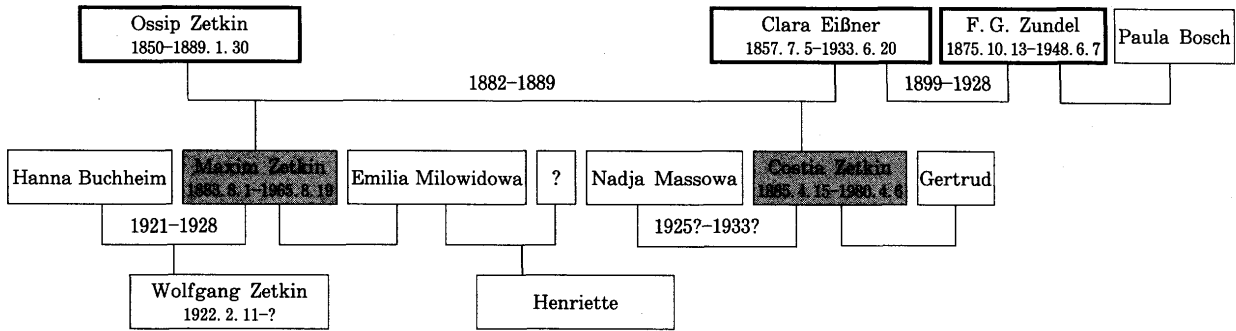
写真3 コスチャの筆跡 プラハ, 1933年4月12日  
(SAPMO-BArch NY 4005/56, Bl. 127.)

33 コスチャの消息は, マクシムの記録では1933年以降不明とされている (SAPMO-BArch NY 4005/113, Bl. 55)。しかし, 1965年マクシムの82歳での没後しばらくして, U.S.A.のクララの研究, カーレン・ハニーカットは, 当時88歳のコスチャとその妻ゲルトルートと, 1972年11月21日ニューヨークのロングアイランドで, 1973年1月5日マンハッタンでインタビューをした (Honeycutt 1975: 13)。インタビューは, 1895年から1905年までの政治的・個人的生活の叙述の章に使われており, マクシムは, 主に, クララとローザ, ベルンシュタインとの関係について思い出を語っているが, ルイーゼ・ツイッツやカール・カウツキーとの関係にも及ぶ (Honeycutt 1975: 414)。1973年1月5日にはコスチャの妻ゲルトルート (Gertrud Zetkin) が, クララを激しやすい気質を持っていたと述べている。この頃のクララを知っているゲルトルートとは誰か。インタビューには, コスチャとゲルトルートがどうしてニューヨークに在るのかの説明がない。しかし, このインタビューによって, コスチャはU.S.A.にその足跡を残し, その妻ゲルトルートとともに記録に残り, さらに1980年にはその死の知らせがカナダのB.C.のゲルトルートから祖国にもたらされ, SAPMOに入る (SAPMO-BArch NY 4005/127, Bl. 14-17)。それによれば, コスチャはインタビューの翌年1974年頃から, 病気になったと思われる。

#### 4. クララー・ツェトキーンと息子たちの婚姻関係図

本誌前稿と本稿で、クララーとの二人の息子とその配偶者、一人の孫との文通を追うことによって、これまで明らかにされていなかったクララーの私的生活を叙述した。そのことから、これまで筆者が把握していたクララーの家系図（伊藤 1984: 49）の何点かの空白を補うことができた。

クララー・ツェトキーンと息子たちの婚姻関係図を以下に示す。



クララー・ツェトキーンと二人の息子マクシム、コスチャの婚姻関係

#### おわりに

筆者が本誌掲載の二つの論文で扱った期間は、1920年代以降1933年までで、クララー・ツェトキーンの晩年であった。今年2007年は冒頭に述べたように、生誕150年であるが、今クララーを対象に研究することの意味について私は二つを考えている。

第1に、今日のジェンダー平等をめざす思想や運動において、ベーベルの系統を引くマルクス主義女性解放論者クララー・ツェトキーンの果たした役割は何であり、経済のグローバリズム、新自由主義思想が世界を席捲するなかで、今日に蘇り、引き継がれるものは何かをクララーを通じて明らかにすることの意味である。

第2に、稀有な国際プロレタリア女性運動のリーダーとして、また社会主義者として、SPDからKPDへ、第二インターナショナルからコミンテルンへ、レーニンからスターリンへと流れる「時代の子」として、当然逃れることのできない制約のなかで、クララー・ツェトキーン自身がどのように生きたかを、ソ連・東欧の崩壊後に公開された資料を基に明らかにすることの持つ意味である。

本稿は、私の研究の、上記第2の意味を問う部分の「小片」である。本研究は、平成17-20年度の科学研究費補助金(C) (課題番号17510224)の一部として行われている。

なお、本文中の手紙は、[SAPMO-BArch NY 4005/127, Bl. 14]のみ手書きのまま、それ以外は、タイプ活字に翻刻されて公表されていた。また、[SAPMO-BArch NY 4005/56, Bl. 127.]のように手書きの原文が付されているものもあった。邦訳は伊藤による。

引用文献 (著者名アルファベット順)

- アンダースン, イーヴリン (1945=1974 大木貞一訳) 『ハンマーか鉄床か—ドイツ労働運動史』東邦出版社, 東京。
- Badia, Gilbert (1993=1994 Florence Hervé und Ingebourg Nodinger) *Clara Zetkin, Eine neue Biographie*, Dietz Verlag, Berlin. (原書名は *Clara Zetkin, féministe sans frontières*, Les Editions Ouvrières, Paris.)
- Dornemann, Luise (1957) *Clara Zetkin, Leben und Wirken*, Dietz Verlag, Berlin.  
(邦訳: 1957年版=ドルネマン著 武井武夫訳 (1969) 『解放運動の母, クララ・ツェトキンの生涯』新日本出版社, 東京) この伝記の原書は, *Clara Zetkin, Leben und Wirken* (5., völlig neu erarbeitete und ergänzte Auflage) として 1963年に改訂され, その後も版を重ねた。
- Dörnenburg, Manuela (1997) *Clara Zetkin, Eine Annäherung*, Edition Korona, Birkenweder.
- フレヒトハイム, オシップ. K. (1948=1971 足利末男訳) 『ヴァイマル時代のドイツ共産党』東邦出版, 東京。
- フレリヒ, パウル (1948=1991 伊藤成彦訳) 『ローザ・ルクセンブルク—その思想と生涯』御茶の水書房, 東京。
- Honeycutt, Karen (1975) *Clara Zetkin, A Left-Wing Socialist and Feminist in Wilhelminian Germany*, Diss. Columbia University.
- 伊藤成彦 (1991) 『ローザ・ルクセンブルクの世界』社会評論社, 東京。
- 伊藤セツ (1984) 『クララ・ツェトキンの婦人解放論』有斐閣, 東京。
- 伊藤セツ (2006) 「クララ・ツェトキン研究におけるロシア—モスクワでの RGASPI アルヒーフ利用を中心に—」『昭和女子大学女性文化研究所紀要』No. 33, 53-63。
- 伊藤セツ (2007) 「クララ・ツェトキン晩年の私生活の一断面—ドイツ連邦文書館 SAPMOに残された孫ヴォルフガングへの手紙を通じて—」『学苑』No. 797, (2)-(19)。
- カウツキー, ルイーゼ編, 川口浩・松井圭子訳 (1983) 『ローザ・ルクセンブルクの手紙—カールおよびルイーゼ・カウツキー宛— (1869-1918)』岩波書店, 東京。
- ルクセンブルク, ローザ, 伊藤成彦他共訳 (1976) 『ヨギヘスへの手紙』河出書房新社, 東京。
- ルクセンブルク, ローザ, 伊藤成彦訳 (1991) 『友への手紙』論創社, 東京。
- Luxemburg, Rosa (I, II, III, 1982, IV, 1983, V, 1984) *Gesammelte Briefe*, hg. von IML beim ZK der SED, 5 Bde., Berlin.
- マグダーマツト, ケヴィン&ジェレミ・アグニュー (1996=1998 萩原直訳: 332) 『レーニンからスターリンへ—コミンテルン史』大月書店, 東京。
- マイネッケ (1946=1974 矢田俊隆訳) 『ドイツの悲劇』中央公論社, 東京。
- 西川正雄 (1989) 『第一次世界大戦と社会主義者たち』岩波書店, 東京。
- 西川正雄 (2007) 『社会主義インターナショナルの群像 1914-1923』岩波書店, 東京。
- Puschnerat, Tânia (2003) *Clara Zetkin, Bürgerlichkeit und Marxismus, Eine Biographie*, Klartext, Essen.
- Weber, Hermann/Herbst, Andreas (2004) *Deutsche Kommunisten—Biographisches Handbuch 1918 bis 1945*, Dietz Verlag, Berlin.
- 矢野久/ファウスト, アンゼラム編 (2001) 『ドイツ社会史』有斐閣, 東京。

(いとう せつ 福祉環境学科)